ロバート・バートン『メランコリーの解剖』における constancy の諸相を探る

榊原 知樹

17 世紀イギリスのロバート・バートン（Robert Burton, 1577–1640）が著した『メランコリーの解剖』（*The Anatomy of Melancholy*, 1621）は、鬱という心の病の原因・症状・治療法を論じ尽くそうと試みた百科全書的大著である。この著作は 3 部構成で、第 1 部ではメランコリーの原因と症状、第 2 部ではその治療法、そして第 3 部では具体例として恋愛によるメランコリーと信仰によるメランコリーが論じられる。本論考では「変わらないこと」や「動かないこと」を意味範囲に包含する“constancy”という語に着目し、バートンの著作に見いだされる constancy の諸相がメランコリーの原因・症状・治療法の諸要素といかなる相関関係にあるかを考察することで、これまで見過ごされてきたバートンのメランコリー論の重要な一面に光を当てることをめざした。

1. バートンのメランコリー観

イギリスでは1580年ごろから数十年間にわたりメランコリーが流行したとされる。これをバートンはイギリス社会を覆いつくす流行病とみなし、ガレノスの四体液説にもとづくメランコリー観で本著作を執筆した。バートンはメランコリーを「精神のかき乱された状態」ととらえ、その主たる原因を“phantasie”（本論考では「空想力」と称する）の働きと関連づけて認識していた。空想力には眼前に存在しない対象物の心象（イメージ）を生み出す機能がある。バートンによればメランコリーの主因は、この空想力が不調をきたして制御不能に陥り、もしくは自己閉鎖的な悪循環に陥ることにある。本著作が「孤独であるなかれ、怠惰であるなかれ」という教訓で結ばれていることは、この２つの状態が空想力の働きに変調を招きやすく、メランコリーの原因になりやすいとの認識と密接にかかわっている。バートンにとってメランコリーの治療とは、空想力の働きを適切な制御下に置くことで、精神を整った状態に導くことを意味した。

2. ルネサンス期ヨーロッパにおける constancy 概念

本論考で着目した constancy は、メランコリーの原因と治療の双方に深く関わる概念である。*OED* でこの語を引くと、16 世紀から 17 世紀にかけての用法のうち、本論と関連の深いものとして、“The state or quality of being unmoved in mind; steadfastness, firmness, endurance, fortitude”と“The quality of being invariable; uniformity, unchangingness, regularity”の２つがある。前者は日本語で「不動心」や「恒心」などの訳語があてられる用法にあたるのに対し、後者は「変化しないこと」を中心的な意味領域とする。

イギリスではメランコリー流行のしばらく前から新ストア主義が大きな影響力を及ぼすようになっていた。新ストア主義は、ルネサンス期ヨーロッパにおいて古代ローマのストア思想を復興させることをめざした運動である。その指導的存在であったフラマン人の人文主義者、ユストゥス・リプシウス（Justus Lipsius, 1547–1606）は、constancy を主題とするラテン語の著作『不動心について』（*De constantia*, 1584）のなかで、*constantia* という語を、外的要因の影響によって精神が揺るがない性質と定義している。新ストア主義において注目された古代ローマのストア哲学者、セネカ（Lucius Annaeus Seneca, 4 BCE–65 CE）において constancy はきわめて重要な徳目であり、同じく *constantia* を主題にした『賢者の恒心について』（*De constantia sapientis*）の中で *constantia* を「変化する状況のなかで変わらずにいること」（*unus idemque inter diversa*）と説明している。セネカは外的要因によって影響を受けないことを、ストア思想の理想を体現した「賢人」（*sapiens*）の資質とみなし、逆に、絶えず変化を求め、動き回ることを「病んだ魂」の傾向として戒め、同じ場所に留まる能力を「よく整えられた精神」のあかしとして重視した。

3. バートンのメランコリー論に現れる「動き」と「変化」

constancy に対するバートンの認識には分岐が見られる。まず、リプシウスが重視していた「外的要因の影響によって精神が揺るがない」という側面を考えてみよう。人間の精神がいかなる状態にあればメランコリーが誘発されにくいかはバートンにとって重要な関心事であった。『メランコリーの解剖』の序文には、ストアの賢人が心の病としてのメランコリーに罹患しないことを示唆する記述は見られ、また、賢人が体現している「精神の平静」や「自然に即して生きる」といった徳目は、バートンがメランコリーの原因や治療法を論じる際に言及する要素と強い親和性が認められる。しかし、人生の苦境に陥ったことによるメランコリーの誘発を論じている箇所

においてすら、バートンは精神を堅固にすることを唱えることはなく、メランコリーの原因や治療に関する考察において外的要因に対する「耐性」への言及はほとんど見られない。

バートンのメランコリー論においては、constancy の語義のうち「変化のなさ」や「一定していること」という要素のほうに焦点があてられる。「変化のなさ」は、それが精神的安定を含意する場合には肯定的にとらえられ、読者に対してその重要性を説くためにセネカなどストア哲学者の言葉が援用される。しかしながら、「変化のなさ」が「動きの欠如」を含意し、精神的不活発の色合いを帯びてくると、それをバートンはメランコリーを誘発する特質とみなして警戒し、「変化のなさ」を退ける傾向が認められた。これはそのような「変化のなさ」が、バートンがメランコリーの主要な原因とみなす idleness（怠惰）に接近する危険があるためと考えられる。

4. バートンの文体における constancy

文体に目を転じると、バートンは古典古代から中世を経てルネサンス期に及ぶ、膨大な数の作品から引用・借用した断片をパッチワーク状にちりばめる cento 形式を執筆に用いた。バートンのテクストは、ごく短い一節のなかにも種類の異なるテクスト要素が高密度に盛り込まれており、要素間の切り替わり方において類例のない多様性をそなえている。こうした文体は、読者の精神を四方八方に揺さぶり続けることで「思考を分散」させ、空想力を自己閉鎖的な負のスパイラルに陥らせることを回避する方向で作用する。また同時に、精神を「読む」という行為に没頭させ続けることで、メランコリーの誘因となる精神的不活発を回避する作用をもたらす。言い換えれば、読者の精神は単一の直線的な軌道を進み続ける運動から解き放たれ、自由度の高い連想的進行によって振幅の広い運動を促されることになる。これを constancy の視点から特徴づけるなら、「読む」という行為によって「精神が能動的に動く」という状態を constant なものとしつつ、しかし同時に、その内容は constant ではない—むしろ constant とは正反対の性質をもつ—状態を生み出しているといえる。これは精神を活発に働かせることで空想力の働きを制御下に置こうとする志向性を示唆しているように思われる。

5. 結びにかえて

本論考では、メランコリーを多角的に論じたバートンの『メランコリーの解剖』を constancy の視点から再評価し、メランコリーの原因と治療にかかわるバートンの思想と文体に現れる諸要素について次のことを明らかにした。第１に、新ストア主義で重視された不動心・恒心という意味での constancy を、バートンはほとんど考慮しておらず、精神的耐性を高めることでメランコリーを回避するという志向性は希薄であった。第２に、不変性・一定性という意味での constancy については、バートンには「動きを伴わない状態」の不変性を、メランコリーの誘因となる idleness に近接する状態として退ける一方、「動きを伴う状態」の不変性をメランコリーの予防・治療との親和性が高い特性とみなす傾向が認められた。第３に、膨大な数の作品から借用した断片を寄せ集める cento 形式の巧みな利用には、精神が能動的に動き回る状態を constant なものとするという志向性が確かめられた。以上から、バートンはメランコリーの誘因となりうる作用を受けても精神が動じない状態をめざすのではなく、むしろ読者の精神を活発に動き回らせることから治癒効果を引き出そうとしたと考えることができるであろう。

主要文献

Babb, Lawrence. *The Elizabethan Malady: A Study of Melancholia in English Literature from 1580 to 1640*. Michigan State College Press, 1951.

Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy*. Edited by Thomas C. Faulkner, Nicolas K. Kiessling, and Rhonda L. Blair, Clarendon Press, 1989–2000. 6 vols.

Chew, Audrey. *Stoicism in Renaissance English Literature: An Introduction*. Peter Lang, 1988.

Gowland, Angus. *The Worlds of Renaissance Melancholy: Robert Burton in Context*. Cambridge UP, 2006.

Lipsius, Justus. *On Constancy: De Constantia*. Translated from Latin by Sir John Stradling, London, 1549. Edited by John Sellars, Phoenix Press, 2006.

Lund, Mary Ann. *Melancholy, Medicine and Religion in Early Modern England: Reading* The Anatomy of Melancholy. Cambridge UP, 2010.

McCrea, Adriana. *Constant Minds: Political Virtue and the Lipsian Paradigm of England, 1584–1650*. U. of Toronto P, 1997.

Seneca, Lucius Annaeus. *Epistles 1–65*. Translated by Richard M. Gummere and edited by Jeffrey Henderson, Harvard UP, 1917.

---. *Moral Essays, Vol. I*. Translated by John W. Basore and edited by Jeffrey Henderson, Harvard UP, 1928.

Shirilan, Stephanie. *Robert Burton and the Transformative Powers of Melancholy*. Ashgate, 2015.